弘学時報

第 46 号
(年４回発行)
編集発行
弘前学院大学
広報委員会
印刷所
㈲小野印刷所

二〇一一(平成二三)年度
学位記授与式が挙行される

去る、三月十七日(土)に二〇一一(平成二三)年度の学位記授与式が本学体育館にて挙行されました。文学部第38回、社会福祉学部第10回、看護学部第４回、大学院社会福祉学研究科修士課程第８回、文学研究科修士課程第６回、総勢一四八名が所定の学業を卒業並びに修了し、一人一人晴れやかな笑顔で吉岡学長より証書を頂き、学舎を巣立っていきました。

社会への一歩を踏み出した卒業生・修了生の皆さんに、神様の導きと祝福が豊かにありますようにお祈り申し上げます。ご卒業・修了、本当におめでとうございます。

二〇一一(平成二三)年度卒業式式辞

学長　吉岡　利忠

本日、弘前学院大学文学部38回生、社会福祉学部10回生、看護学部４回生ならびに大学院社会福祉学研究科修士課程８回生、大学院文学部修士課程６回生の学位記授与式を挙行するにあたり、弘前学院理事長・学院長阿保邦弘先生はじめ卒業生、修了生のご家族の皆様、校友会、父母と教職員の会、理事会、評議委員会そして教職員各位のご臨席を得て、ここに式辞を述べる機会を与えられたことは、私にとりまして誠に光栄であります。

本日、ここに総勢一四八名の皆さまが弘前学院大学から卒業・修了して行きます。この中には、本日、目出度く大学院を修了しました文学研究科三名および社会福祉学研究科一名の四名の方々も含まれます。全て女性ですが、日頃のお仕事や教育活動などで多忙の中、大学院の授業のみならず修士論文作成に多くの時間を費やし、論文の主査、副査の先生方の厳しい評価をクリアし、見事、修士号を受けることができました。その努力には敬服するばかりです。

是非、この度、大学を卒業する皆さんも、それ以上の知識や技能を学ぶ必要性に迫られた時には、本日、修士号を頂いた先輩諸氏に見習い、大学院への門を叩いて下さい。さらに、人間性の溢れる生涯を送れると思います。この称号は、国内では修士として履歴に記載され、国外ではMaster of Arts(M.A.)と称されます。

これまで、卒業生ならびに修了生の諸君に対し在学中に温かく見守り励ましご支援下さいましたご家族の方々に心よりお祝い申しあげます。皆さんがそれぞれの科目を修学する過程において、私たち教員、職員が愛情を持ちながらも、しかし、時には厳しく皆さんに対応させていただきましたが、何卒、お許しいただきたいと思います。

昨今は、社会情勢、経済情勢ともに大変厳しいものがあり、就職については正に氷河期とも言われます。大学で開催される三学部を対象にした就職セミナーも恒例の行事になっていますが、このセミナーには首都圏および北東北三県から多くの会社、企業、医療施設などが参加しております。その甲斐もあり現在の就職率は、青森県全体および国で纏めている就職率を上まっており、全体で91・0％（三月十五日現在）であります。今後さらに内定率が増え、最終的には１００％になるものと期待しております。

皆さんは、入学時にリトリートという一泊二日の行事に参加しました。各学部学生全員が垣根を超え同じ施設の中で建学の精神とほんの少しですが聖書の心を学びました。記憶に新しいことと思います。大学のさまざまな行事では、木曜日の通常礼拝のみならず創立記念礼拝、秋の特別礼拝、クリスマス礼拝、クリスマス音楽の夕べがありました。礼拝では、宗教主任、牧師さん、教員、そして諸先輩の貴重な話しや心が和む音楽や歌唱を聴くことができました。このようなことは、社会に出るとなかなか経験することはできなくなると思います。静かな環境の中での貴重な体験は、これから社会に出る皆さんにとって自分が置かれている状況や今後の進むべき方向を見定める時の態度を知らず知らずのうちに養ってくれています。たとえ短い時間の礼拝であっても、極めて有意義な体験であったと思っております。

弘前学院は創立一二六年目に入ります。歴史と伝統のある大学に在学したことに、堂々たるプライドを持って欲しいと思います。弘前学院創設以来の歴史や伝統は、皆さんの誇りや自信を形成してくれています。そして、この伝統を持つ弘前学院大学に入学し卒業・修了したことを大いに誇りとして下さい。

弘前学院聖愛中学校・聖愛高等学校そして大学は、中・高・大そして大学院までの一貫教育を推し進めていますし、東北地方にあっては誇れるものです。この一貫教育はその必要性を充分意識した結果ですし、理事長ならびに全教職員の熱い想いを背景にし、この地域から望まれた結果だと信じております。聖愛中学校は大学の看護学部と同様に、この三月に第４回生を送り出しました。先日、三月一日に弘前学院聖愛中学校高等学校の卒業式に参加しました。聖愛中学校に第一期生として入学した生徒が聖愛高校をまでの六年間を聖愛で学び、見事難関大学へ合格した生徒たち、もちろん弘前学院大学に入学する生徒たちのことが話題になっていました。聖愛人（ビト）そして弘前学院大学の略称である弘学をとって弘学人（ビト）と言っていいかも知れません。さらに、在校生、数万人を数える卒業生、同窓会の強い絆が形成され、地方の教育機関として輝いております。卒業・修了する皆さんは、同窓会である弘前学院校友会のメンバーになります。大学の状況や活動が、弘学時報という新聞やその他の情報を介して知ることができます。

さて、大学を卒業・修了した皆さんはさまざまな環境に飛び込むことになり、色々な人たちと巡り会います。年齢の異なる人たち、学歴が異なる人たち、地位が異なる人たち、大学生時代では友達、部活の仲間というほぼ横の繋がりが主であったものが、歴然とした上下関係が存在する中に入るのです。皆さんにとってはかなり強烈な試練が待ち構えています。大学生活とは、全く異なります。寝不足になったり、頭痛を訴えたり、たまにはお腹も痛くなるでしょう。ストレス状態です。現在、社会で働く労働者は六割以上にストレスを感じていると報告されています。これから社会に出て行く皆さんは１００％ストレスを受けるに違いありません。ストレスとは、体の中にストレスという得体の知れないものが生じた状態であると、カナダのHans Selyeが提唱しました。環境の急激な変化もそのストレスを誘発する一つです。しかし、このストレス、上手い具合に利用すべきです。新しい仕事を始めるとき、新しい社会に向かうとき、新しい仲間ができるとき、新しいライバルと出会うとき、新しい日々がはじまるとき、全てにこのストレスが台頭してきます。新しい環境に臨むとき、このストレスを土台にして前に進むようにして下さい。この緊張を持つ姿勢が厳しい環境にも馴染むものです。大学で自然と培われた姿勢・態度がこのストレスを上手い具合に払いのけてくれるのです。

私の好きな言葉を紹介しましょう。それは、See and do. Don't think too much. です。

（次ページに続く）

本多庸一とキリスト教（番外編四）

学校法人弘前学院
理事長　阿保　邦弘

「本多庸一先生召天百周年記念シンポジウムの開催と共催について」（依頼）

青山学院理事長半田正夫氏より次の依頼分が寄せられた。内容は

「拝啓　ますますご清祥のことお慶び申し上げます。

さて、ご高承のとおり、本多庸一先生は嘉永元年（一八四八年）津軽藩の上級武家に生まれ、東奥義塾の草創期に塾頭・塾長を歴任、弘前学院を創立し、教育に、また自由民権運動の指導者として地方政治にも従事し、初代青森県会議長に選任され、広く社会に貢献されました。明治二十三年（一八九〇年）、日本人として最初の青山学院長となり、武士道とピューリタニズムに培われた謹厳さとともに、キリスト教に養われた柔和さを持ち「慈父のごとき先生」と慕われつつ、十七年間にわたり院長として青山学院発展の基礎を固められました。そして、明治十五年（一九一二）三月二十六日、なお大伝道の計画を夢見つつ、休みなき奮闘の生涯を閉じられたのです。

そこで、本年二〇一二年の本多庸一先生召天百周年を記念して、本学院ではシンポジウムをはじめとして各種記念行事を実施することに致しました。

本多先生は、日本におけるキリスト教の先駆者として、日本メソジスト教会の発展に尽力されましたが、キリスト教信仰に基づく教育が真に求められている今、本シンポジウムは、先生の優れた生涯と業績に改めて思いをはせ、多くの学生・教職員・関係者とともにその威徳をたたえ、先生の志を継承するために開催するものであります。

つきましては、この趣旨にご賛同いただき、本企画の共催にご協力くださいますようお願い申し上げます。

シンポジウムに使用する会場は、本年四月に竣工する大学十七号館六階に設備された四カ国語対応、五百六十二席の国際会議場兼大講義室において開催いたしますが、本多庸一先生のお名前を冠し、「本多記念国際会議場」と命名いたしました。

事情ご賢察の上、何卒ご協力賜りますよう重ねてお願い申し上げます。

敬具

記

一、名称　本多庸一先生召天百周年記念シンポジウム
主題「Ｍａｎを出さしめよ」
二、日時　二〇一二年五月十九日（土）　午後二時三十分～四時三十分
三、会場　本多記念国際会議場（青山キャンパス　大学十七号館六階）
四、主催　学校法人青山学院
共催（予定）更新伝道会、日本キリスト教団本多記念教会、日本キリスト教団弘前教会、学校法人東奥義塾、学校法人弘前学院　以上」

というものであった。

弘前学院は去る二月二十四日に理事会を開催し、積極的に協賛し、五月十九日には理事長はじめとして多くの出席を決定し、青山学院理事長宛に回答した。

シンポジウムのプログラムは、つぎのようになっている。

本多庸一先生召天100周年記念シンポジウム（案）

■プログラム

14:35～14:45(10分)	主催者挨拶　青山学院院長　山北　宣久
14:45～15:15(30分)	基調講演　青山学院大学名誉教授　気賀　健生
15:15～15:20(5分)	ブレイク
15:20～16:30(70分)	パネル討論「本多庸一～Manを出さしめよ」 深町　正信　青山学院名誉院長 学校法人クラーク学園理事長 気賀　健生　青山学院大学名誉教授 酒井　豊　青山学院大学教育人間科学部長 梅津　裕美　日本基督教団本多記念教会牧師 コーディネーター 嶋田　順好　青山学院宗教部長 青山学院大学国際政治経済学部教授
16:30	閉会挨拶

イギリスCambridge大学の医学生理学研究者であるM. Fosterの言葉です。最初のフレーズは、しっかりと観察する、状況を判断することになるかと思います。これから飛び込んで行く社会において自身のおかれた立場をしっかり把握することと理解してよいでしょう。次のフレーズは、あまり考えすぎないように、ということです。もちろん、考えることは必要です。考え過ぎの場合は時間だけが経過して行き、次の行動に移せなくなることを良く経験します。やはり直ぐに行動に移し、その時点でまた何か発生したらまた次なる行動に進む。少し背伸びした解釈をすると、「純粋な観察は、その現象を理解する鍵を与える」、になるのではないでしょうか。しっかりとした観察によって、さまざまな現象のメカニズムが分かってくるものだよ、ということです。また、こんな言葉もあります。Try first. Think next. 意味合いとしてはほぼ同様でありましょう。先ずやってみなさい。それから考えても遅くない。考えることが後の方が、その場面・場面を振り返ってみることになり、より適切な評価を得ることができます。

少し話は変わりますが、米国航空宇宙局NASAでは、宇宙飛行士の訓練においてThink ahead という姿勢を徹底的にたたき込まれるということです。直訳すれば、「前を考えよ」ですね。これから何が起こるか常に先を予測して備えよう、ということでしょう。現在、地上400km上空には国際宇宙ステーション、International Space Station, ISSが毎秒9kmの速さで地球上空を回っています。ISSは外界から閉鎖された居住施設です。何か事故が生じても外へは逃げることができません。外からの手助けも不可能です。ちょっとしたトラブルが生じても、地球への帰還はもとより宇宙飛行士の生命も危うくなるでしょう。そのトラブルに即座に対応するために、現時点で考えられるトラブル全てに対する対策を厳しい訓練で修得しておかなければならないからです。このような過酷な環境においては常に前向きな態度が必要で、Think ahead ということを言われるのでしょう。皆さんは、ここまで究極な環境に飛び込むということではないにしろ、これから経験する社会においてこのような姿勢を持つことは必要であると思います。前進すること、プラス志向で向かうこと、あまり後ろを振り向かず、楽しく仕事や余暇も過ごすことが大切でしょう。その時、心地好い疲労も生まれるものです。疲れたら休む。お腹一杯食べて時間に関係なく寝て休養を取るのではなく、軽い運動などを加えた積極的休養が、明日への活力を生み出すのです。

皆さんは、これから社会に出て様々な事を経験するでしょう。あるプロジェクトチームに所属したり、ある部課署に配属されたり、あるいは最初から独りで仕事をしなければならない環境に置かれたり、全てに上司がいるとは限らないし、いても手とり足とり懇切丁寧な指導や教育はないかも知れません。それが普通かも知れません。そこで、どんな場合にでも、仕事に就いたらそれを達成するために前向きに進んでいかなければなりません。仕事上の問題は自身で解決しなければ先に進みません。いわゆる問題解決型の姿勢が必要になりましょう。問題解決型とは、誰から言われてやるという受動的なものではなく、自ら行動を起こして対応するという能動的な態度が備わっていなければなりません。この姿勢、皆さんにはキチンと備わっています。それは、大学での授業や実習で修得されています。計画してそのための行動を起こしてその結果を評価し、改善しながら前に進むという、Plan, Do, Check, Act の頭文字をとってPDCA-Cycleが社会では必要になります。

以上、色々と述べましたが実社会に飛び込む皆さんには、是非とも、このような姿勢で臨んで欲しいと思います。どうぞ、頭の何処かに刻んでおいてください。卒業・修了していく皆さんには、期待と希望に溢れる素晴らしい毎日が待っております。大学で習得した知識や態度を、思う存分に発揮して下さい。そして、弘前学院大学の後輩たちに、夢と希望を与えて下さい。

繰り返しになりますが、弘前学院大学を卒業・修了したことに、自信と誇りを持ちながら、胸を張って皆さんの志を達成するために歩み続けてください。そして、私は、将来、皆さんが素晴らしい伴侶を得て、行く行くは皆さんのお子様たちが弘前学院聖愛中学校・高等学校そして母校となる弘前学院大学を目指していただき、弘前学院の歴史を共に作っていただきたいものです。そのような、皆さんに愛される大学になるように私ども教職員は一丸となって教育環境、研究環境、運営環境を改善すべく前進したいと思います。そして、皆さんには、是非とも、弘学人、になって欲しいと思います。

以上、皆さんの前途を祝し、私の式辞といたします。

皆さまにそして全ての大学関係者に神の思し召しを。

God Bless You.

談話室

「もう駄目だ。」と思った時に戻る場所

看護学部　講師　新田　純子

看護師になるためには、看護系の大学、看護学校等を卒業して看護師国家試験に合格しなければなりません。看護師国家試験の受験を控えた看護学部の学生たちは、人生でこんなに勉強することはないだろうと思うくらい頑張ったことでしょう。

頑張っても思うように成績が伸びないと、駄目かもしれないとプレッシャーに押しつぶされそうになることもあったかもしれません。でも、受験まで頑張りきった学生は、そこでまた成長し、そうして社会に巣立っていきます。看護学部の玄関のオーナメントに描かれている葡萄の実が熟して（半熟くらいかな）摘まれていくように。

私は看護の教員になる前に、臓器移植コーディネーターをしていました。その主な役割は、脳死となった患者さん、またはご家族が臓器提供を希望した場合、その臓器を移植するための橋渡しをすることです。大切な人の臓器を提供するという意思を最後まで貫いたご家族から気付かせていただいたことは、命の尊厳を守るために決断する勇気です。そして自分以外の人のために最後を生きぬくことの尊さでした。

この時から私の心の奥の方に、「もう駄目だ。」と思った時に戻る場所ができました。生かされていることを大切にして生きている?と問い返してくれる場所です。今、どう生きたいのか考え、答えを見つけるために戻っていく場所になっています。

生きているうちには大変なこともありますが、生かされていることを大切に生きていると希望が見えてくるようです。

つい最近も「もう駄目だ。」と思うことがありました。でも、今回は、学生たちの良いニュースに可能性を信じて頑張ればできると励まされました。頑張った学生たちに感謝し、心から称賛を送ります。

一年間の行事を振り返って

地域総合文化研究所所長　笹森　建英

看護学部の企画では、緩和ケアの歴史と現状について、秋庭聖子氏を招いて講演会を行った。生命を脅かす病に対しては如何なる方策が必要であるのか、単に医学的な面ばかりでなく、心理、社会、スピリチュアルな面から行われなければならないと指摘された。結局のところ人の命についての思想を学んだのである。

社会福祉学部では、震災などの災害で失われ、汚染された文献資料をどのようにするのか、処理の問題点について、講師としてNPO宮城歴史資料保全ネットワークから平川新氏を招いて、学生共々学んだ。三月十一日が具体的な事例として問題意識を鮮明に持つことが出来た。

文学部の企画では、入江英弥氏による「祭りの変遷と意義について」の講演会を開催した。これらの内容については、三月中に刊行される『地域学 10巻』に収録される。この『地域学10巻』にはその他、本多庸一の思想・業績、笹森要蔵論、ハンセン病の諸問題、方言、「文化」の概念、が収録される。

研究所の名目で行った2つの大きな業績があった。客員研究員 鈴木克彦氏の企画で、縄文文化とアイヌ文化の大きい住居の比較考古学・考現学が行われ、考古学の知識を深めることが出来た。それに関する資料集も刊行した。同じく、鈴木氏の編集による『縄文琴の研究』が出版された。畠山篤、笹森建英両教授の論考も含まれている。楽器考古学上、エポック・メイキングな書物になるはずである。研究所では四月からの新しい行事にも、興味ある企画を進めるつもりである。

大学教育研究会の紹介

文学部　日本語・日本文学科　准教授　坂井　任

本学は文学部英語・英米文学科、同日本語・日本文学科、社会福祉学部社会福祉学科、看護学部看護学科の三学部四学科を擁し、それぞれの専門分野の教員が専門教育を行っていますが、大学にはそれ以外にも多様な専門分野の教員が在籍しており、基礎教育科目・一般教育科目・資格関係科目などを担当しています。このような各学科の専門外の教員は、当該専門分野の単独または少数の教員として存在しているのが実情です。

「弘前学院大学・大学教育研究会」は、専門分野に関わらず教員間の研究交流を図る目的で設立された弘前学院大学一般教育学会を、二〇〇一年に改称しました。設立の歴史的経緯から、文学部一般教育担当の教員を中心に運営されていますが、学内のどの分野の教員でも会員になれます。

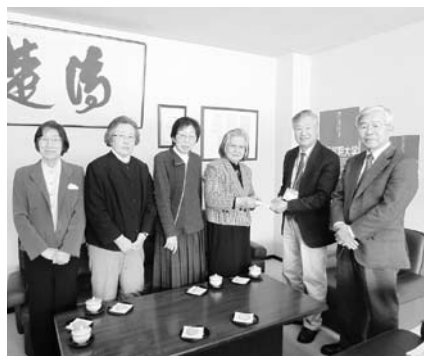
主たる活動としては、年に一度教員に研究発表をしてもらい、質疑討論を行っています。普段はあまり触れる機会のない異分野の研究内容を聞くことで視野を広げられ、ともすると自分の専門分野のみに目が向きがちな大学教員にとって大いに知的刺激となります。なお、研究発表会には会員でなくても参加でき、学生の参加も歓迎しています。発表者には非専門家向けに講演していただくようお願いしていますので、是非ご来聴ください。

今年度は去る二月二十八日、文学部講師須川公央氏（教育学）に「ケアはジェンダー拘束から自由になれるか―エリクソンの女性論とケア論の検討から―」というタイトルで研究発表していただき、学生1名を含む9名の参加者が活発に質疑討論を行いました。ここ数年の発表内容は下の表の通りです。それ以前の発表内容についても、大学HPの学部学科案内・文学部紹介ページ内の「文学部の活動」に掲載されていますので、ご覧ください。

年度	発表者	専　門	タイトル
2008	小川幸裕	社会福祉学	中山間地域における「独立型社会福祉士」の（不）可能性に関する研究
2009	柘植秀道	社会福祉学	18世紀博愛事業の組織特性―慈善学校運動における組織のあり方―
2010	生島美和	社会教育学	地域博物館の理論と展開

弘前学院校友会より　母校援助金寄贈される

去る二月二八日（火）学長室において、弘前学院校友会中田悦子会長より、二〇一一年度の母校援助金三十万円が寄贈されました。今年度は体育館窓の暗幕を購入しました。この援助金は毎年寄贈されます。卒業生の皆様方の熱い援助に心から感謝申し上げます。



研究紹介⑰

シェイクスピアの魅力とは

文学部　英語・英米文学科　准教授　川浪　亜弥子

シェイクスピア（1564―1616）は世界中に知られ、彼の劇作品は今なお世界中で鑑賞されています。しかしシェイクスピアに関する情報は、現代の私たちの目から見ると僅かです。シェイクスピアはイギリスの片田舎のストラトフォードという小さな町に生まれ、その町のグラマースクールへ通ったが何らかの事情で中途退学し、その後何年か経て彗星のようにロンドンの演劇界に登場したとされています。彼についての記録は空白部分が多いため、シェイクスピア別人説を唱える人たちもいます。例えば2011年に制作されたAnonymousという映画は、シェイクスピアという劇作家は実はエリザベス女王の廷臣貴族だったという説を大胆に繰り広げています。別人説の前提とすることは、シェイクスピアの作品は貴族社会を描いたものが多く古代ラテン文学など高い教養を背景とする知識に満ちているため、大学を出ていない田舎者がそのような作品を書けるはずがないというものです。

しかし当時のグラマースクールの教育レベルは相当高く、ロンドンの演劇界に入ったシェイクスピアは貴族の庇護を大いに受けました。シェイクスピアは常に低俗なものと高貴なものの二面性を同時に提示します。田舎者で大学教育を受けなかったシェイクスピアだからこそ、このひとつの物事を相反する視点から捉えるという態度を自家薬籠中の物とすることができたのです。私の研究はこの柔軟な態度をシェイクスピアの作品のなかに読み解くことを目的としています。

その一つのアプローチは、シェイクスピアの古代ラテン作家オヴィディウスの受容についての考察です。オヴィディウスはグラマースクール教育の柱であり、シェイクスピアが劇作の下敷きとして最も好んで用いた作家です。シェイクスピアにおけるオヴィディウス作品の受容を、彼と同時代の宮廷作家リリー、大学出文人グリーンのそれと比較することで、二面を捉える態度に裏打ちされたシェイクスピア独特のオヴィディウス解釈が浮かび上がってきます。

また、当時のカトリックとプロテスタントの衝突という政治・宗教的背景を念頭に、シェイクスピア作品を読んでいます。ここでもシェイクスピアは両刀使いです。ある時はプロテスタント的態度、ある時はカトリック的態度といった風に。その曖昧な態度は、当時の宗教問題を時代超越的な文学材料に変容させ、永遠に私たちに疑問を投げかけます。その問いに誘われて、私はシェイクスピアの作品を読み続けています。

多くを学び達成感のあった卒業研究発表会

看護学部四年　成田かおり

平成二三年度研究発表会は、十二月十七日（土）に看護学部中講義室1と2において行われた。

卒業研究発表会で発表するにあたって、私たちは、四月初めから実習などの合間に卒業研究のテーマについて考え、関係のある文献を調べた。実際に文献を読み内容を検討したりなど様々な方法で卒業研究に励んできた。卒業論文作成にあたっては、様々な壁にぶつかった。自分が知りたい内容の文献がなかなか見つからない時もあり、そのようなときはゼミの先生と相談しながら、毎晩遅くまで図書館や情報科学室でパソコンと向き合い、試行錯誤しながら論文の中身についての検討を行って何回も推敲を重ねてきた。

発表会当日、みんなは普段とは顔色が違っていた。顔が強ばった様子の人や、朝から落ち着かない人、何回もレジュメに目を通す人などそれぞれ緊張しているようだった。しかし、最初の一人目の発表が始まると、緊張しながらも他者の発表を熱心に聴いていた。発表会は、二つの教室に分かれ、更に各分野のグループ毎に行われた。一人の発表時間が7分、質疑応答が3分と計10分で発表会が行われた。発表者は、それぞれ試行錯誤して完成させた論文の内容を抄録にまとめた上で、発表内容をスライドを使って、聴衆に分かりやすいように工夫を凝らし、発表をしていった。質疑応答も答えやすい質問だけではなく、先生方から即答できないような難しい質問もでたりした。それに対して、発表者は自分たちなりの言葉にまとめ、上手く対応していた。また、発表の中には、聴衆を沸かせるような面白いアニメーションを用いたスライドもあり、緊迫ムードが一変して教室中が和む場面もあった。

私自身は、発表するにあたって、事前に何度も練習を行い本番に臨んだ。しかし、緊張して自分のペースで上手く発表することができず、持ち時間の7分はあっという間に過ぎてしまった。終わった瞬間、緊張が解けホッとした。発表後には質問があり、その質問内容を通して、私がテーマとした発表を理解してもらうことができたのではないかと思った。とても達成感が得られた。

私達は約一年間かけてそれぞれの研究テーマに取り組み、検討を行ってきた。今後は臨床の場に出た際に、今回の卒業研究やその発表会で得たものを何らかの形で活かしていきたいと思った。この卒業研究発表会ではみなそれぞれの分野でお互いの発表を聴き、多くのことを学ぶことが出来、良い経験となったのではないだろうか。

卒研発表会風景

二〇一一年度

学内就職セミナー報告

――文学部・社会福祉学部

一月十二日（木）、本学体育館において、学内就職セミナーが開催されました。今年度で七回目となります。

学内就職セミナーは、多くの企業や職種を知り、就職活動への意識を高めることを狙いとしています。二年前までは、主に次年度卒業予定の三年生を対象にしていました。昨年度セミナーから、この時期喫緊の課題である四年生就職未定者対策として、弘前ハローワークも参加しています。二年生が最新の進路全般の情報を得るための就職支援業者の相談ブースも設けました。

当日は、県内外の金融・サービス・自動車販売・教育産業・情報通信等一般企業三十社、福祉施設十一施設、就職支援業者一社、公共就職支援機関から一機関のご参加を頂きました。

全国の大学生の就職内定率は、過去二番目の低水準となっています。

危機打開のため、今年度もハローワークブースを設けました。具体的な求人票を示した求職相談は、その後就職先の決定につながりました。

セミナーは、一二八人（二～四年生）の学生が参加しました。説明時間を一回三十分に区切る総入れ替え方式で行いました。

リクルートスーツ姿も凛々しい学生たちは、各企業のブースを積極的に訪れ、人事担当者の業務内容や試験方法・試験日程などの説明に熱心に耳を傾け、メモを取っていました。また、新入社員教育等の質問をする学生もいました。

学生の多くは「就職活動の第一歩となった」「目指す事業所の情報が得られた」「採用担当者と会って、求められる人材がわかった」「今まで考えていなかった業界や職種の説明を聞き参考になりました」とこれからの就職活動に向けて積極的な話をしていました。

人事担当者からは「おとなしい」という辛口の意見もありました。しかし、多くの人事担当者から「学生の多くが真剣に説明を聞いて素晴らしかった」「例年に比べて意識の高い学生が多かった」「前向きな学生が多いと思います」と本学の学生に対して好印象をもった方が多かったようでした。

森田猛就職委員長（文学部准教授）がセミナー終了宣言をする頃、外は厳しい氷点下の世界でした。あたかも厳しい就職戦線を象徴するかのような「氷の世界」でした。日本経済の先行きが不透明な中で、学生の就職環境の厳しさはしばらく続きます。人生の中で、たった一度の大学新卒としての就職活動です。焦らず諦めず挫けることなく、強い気持ちで就職活動をすることを願っています。就職課は一丸となって、これからも学生一人ひとりのキャリアサポートを図っていきます。

最後に、例年以上に積雪が多く寒さの厳しいこの時期の本学セミナーにご参加いただきました企業や施設、就職支援業者の皆様と、準備から後片付けまで協力して頂いた教職員の皆様に心より感謝を申し上げ報告と致します。

（就職課）

社会福祉士養成校 成績優秀者表彰される

この度、日本社会福祉士養成校協会から二〇一一(平成二三)年度の成績優秀者に対して、三月十七日に表彰状の授与が卒業式後に行われた。

この賞は、学業成績・人物ともに優秀で、社会福祉士養成校の養成課程修了者に対し贈られるものです。

今年度の成績優秀表彰者は、佐藤芽美さんです。

－ 2012 －

看護学部学内
就職セミナー

弘前学院大学独自の企業説明会

2012年 4月28日(土)
午後1時～ 4時まで
場所　弘前学院大学 体育館

いながらにして施設を知るチャンス!!

合同就職委員会

二〇一一年度　理事長賞授与者

■文学部　英　語・英米文学科　山本　康太（弘前高校卒）
　日本語・日本文学科　長谷川可南子（木造高校卒）
■社会福祉学部・社会福祉学科　佐々木啓乃（新屋高校卒）
■看護学部・看護学科　工藤　愛美（盛岡北高校卒）

Not only study

文学部　英語・英米文学科卒　山本　康太

大学生活を振り返ってみると、色々な人と会話をした。友人はもちろん、委員会やサークルの先輩後輩、同じ授業や演習を履修した人、その授業や演習の担当の教員の方々、他にも委員会活動や就職活動を通して大学の職員の方々と、異文化交流プログラムとして留学生や米軍基地の外国の方とも、実に多くの人と話す機会があった。私が話をしたこれらの人たちは当然ではあるが、世代・年齢も出身地も様々であり、話す言葉も方言、外国の方は言語自体異なる。だからこそではあるが、大学で色々な人と話せたということは非常に幸せなことであったと感じる。

色々な人と話すということは大学生活のみならず生涯を通して大事なことである。まず、今まで知らなかった人でも、話をすることで知り合えるし、そこから仲良くもなる。多くの人と話せば話した分、新たな繋がりができる。また、話す人が多ければ多いほど色々な人と話すことになるわけだが、人によって言葉も違うし、当然考え方も違う。だから、色々な人と話すことで今まで知らなかった言葉や知識も増えるし、自分以外の人の考えを知り、その人の考えの影響を受ける、他の人の考えを知って新たに気づくことで、自分の考え方も多様になる。人と話をする面白さはここにあると思う。大学生活では学問に励むことは当然重要だが、学問だけが大学生活ではない。色々な人と知り合って話をし、多くのことを知り、考え方を多様化させていくことも重要だ。

この大学生活で多くの人と知り合い、話すことができた。この経験は私にとって非常にプラスになったと思うし、何より色々な人と話せて楽しかった。本当に充実した四年間であった。

この四年間を待っていた…

文学部　日本語・日本文学科卒　長谷川可南子

長いと思っていた四年間が、あっという間に過ぎ去ってしまった。しかし、この四年間はゆっくり自分の将来を考えられ、沢山の経験が出来た期間だった。

短い大学生活の中でも、入学当初は一コマが長く感じられ、集中力もなくなっていくのだが、慣れてくると学習することが多くて、足りないと感じることもあった。また、自分で必要だと思うとメモを取るため、膨大な量にもなってしまうことも多々あった。当初は大変だと感じていたのに、今では、こんなに一生懸命に学業だけに時間を費やせるのは大学までだと思うと、もっと多くのことが学べたのかもしれないと感じてしまう。学業以外には、ひょんなことからサークルに入部した。部室にはいつも誰かがいて安心できる居場所だった。放課後や空きコマにはちょっと遊びに出かけたり、スポーツ大会や泊まりがけでの活動をしたりと、とても充実していた。そのサークルの先輩と友達と海外旅行に行ったこともあった。ハプニングもあり迷惑をかけてしまったが、自分が如何に小さい人間なのかを思い知らされ、もっと寛大にならなければと強く思った。そして、もっと他の国に行き、その国の世界観や景観を知りたいとも思えるようになった。また、社会勉強のためにバイトもした。お客さんにもそれぞれ個性があり、理不尽なことを言われたり、クレームも沢山受けたりと悔しくて泣いたこともあったが、優しい先輩方や親しみを持って接してくれる人に助けられ、長く続けられた。その中で、技術や話術が鍛えられ、暗算が得意になり、人見知りをせずに人と接することが出来るようにもなった。精神面でも強く鍛えられたように感じ、自己の成長につながったのではないかと思える。

このような経験や日々の生活の中で、自分には何ができるのだろうか、何がしたいのだろうかを考えた。挫折することもあったが、友人や先生方に助けられ乗り越えられた。社会人になる前に経験出来て良かったと思う。今では、将来自分は何がしたいのかが定まったため、その夢に向かってこれからは仕事をしていくことになる。私は、この弘前学院大学で過ごし、学んだことを踏まえ、社会の荒波に流されずに立ち向かって歩んで行く。

弘前学院大学で得た宝物

看護学部看護学科卒　工藤　愛美

月日が経つのは早いもので、あっという間に四年が過ぎ去ってしまいました。この四年間で多くの人との出会い、看護の実習や卒業研究といった様々な経験をしました。

一年次の初めての基礎看護学実習Ⅰでは、不安と緊張の毎日でアセスメントどころか、患者さんとの会話に困りただ固まっていて、患者さんとの日常会話も、趣味や嗜好を聞くことなどたわいもない会話すら出来ませんでした。四年次の実習では、患者さんとの会話が楽しく、その会話の中に、病気に対する受け止め方や不安など大切な情報が詰まっていました。患者さんからのシグナルを受けとめるには、表情や動作、声のトーンなどという非言語的コミュニケーションを通して気付くための観察力を磨いていかなければならないと実感しました。たわいもない会話、そして非言語的コミュニケーション全てがアセスメントであり、そこにも看護が含まれているということを、看護の実習を通して実感し、一人の人と向き合うことの難しさと大切さを学ぶことが出来ました。多くの人との出会いによって、私の狭かった視野が広げられ、一人一人にはそれぞれの人生があることを教えられました。

看護学部での経験は無駄なものは何一つなく、すべて私の糧となり自信に繋がっていました。私の看護観は四年間の貴重な経験の中で培われてきました。これからも、経験から学び、感性を研ぎすまし、人として看護師として成長していきたいと思います。

弘前学院大学の四年間を、支えてくれた先生方や家族には感謝の気持ちでいっぱいです。看護の実習や卒業研究を通して、時には叱られたり、失敗して戸惑ったり、助言を求めた時もありました。熱心に教えてくださった先生方がいたからこそ現在の自分があります。本当にありがとうございました。

看護学部での実習を共に乗り越え、看護師国家試験に向けて努力してきた四九名の仲間と、この四年間で得た貴重な経験は私にとって大切な宝物です。

祝卒業

大学生活を振り返って

社会福祉学部　社会福祉学科卒　佐々木啓乃

これまでの大学生活を思い返すと、大学で出会った人々との関わりや専門的学問への取り組み等、とても有意義で、充実した二年間を過ごすことができたと感じています。

編入当初は、大学生活に戸惑い、時間の経過が遅く感じられる程に緊張の日々が続いていました。しかし、友人や後輩ができ、関わることができる人々が増えていったことで、段々と大学生活を楽しく過ごせるようになったことを思い出します。

また、私は大学生活の中でも、社会福祉という専門的分野の講義や演習、学外実習等を有意義なものにすることができました。このことは、自分の力だけではなく、協力し合える友人や後輩、そして、多くの助言をくださった先生方の存在が大きいと感じています。友人や後輩と共に過ごし、相談し合い、自分は一人ではないと思えたことは、とても心強いものでした。先生方からは、時に厳しくも温かい言葉をかけていただき、自分がするべきことを考える手助けをしていただきました。特に社会福祉実習では、事前準備の段階から友人や先生方に多くのアドバイスを受けたことで、実習中も明確な目標のもと、真剣に取り組むことができたと思っています。

私は、多くの人々に支えらえていたからこそ、二年間あきらめることなく大学に通い、勉学に励み、今卒業の時を迎えることができるのだと思います。大学生活では、専門的知識を得ただけでなく、自分が様々な人々との関わりの中で多くの力を借りていることを知ることができました。これは、私にとって重要な学びだったと感じています。

最後になりますが、これまで支えてくださった先生方をはじめ多くの方々には、感謝の気持ちで一杯です。ありがとうございました。卒業後も自分が様々な人々に支えられていることを忘れず、社会人としての生活を送っていきたいと思います。

大学院生活を振り返って

大学院　文学研究科修了　吉岡　倫子

神楽が好き、というシンプルな動機で入学した大学院の生活は、本当にあっという間でした。その間に病気で入院したり、東日本大震災による様々な影響が生活や仕事にあったりと、私の人生観を変える大きな出来事がこの大学院生活でありました。しかしその中で得たものは計り知れません。

大学院の日本文学や民俗学の講義では、時代背景に沿って日本人の思想や世界観を学びました。日々外国人の中で生活をしている私にとってそれらの知識は、日本人としてのアイデンティティーの教化になっただけでなく、日本の言葉の美しさ、民俗や文化の魅力を思い知らされた講義でした。この知識を持って外国人に接したときは、日本の良さをより深く伝え、感心を持ってもらうことが出来ると思います。

また初めての修士論文では研究の手法、論文全体の構成や文章表現、誤字脱字、引用文献の書き方など、膨大な知識を忍耐強くご指導いただきました。書き出しが遅かったため時間が短く、大変苦しいものでした。書いては捨て、書いては消しの作業を繰り返していくうちに、自分がいかに浅い理解、乏しい知識の上に構築されて論文を書いているのか思い知らされました。しかしテーマを突き詰めていく作業は、論旨をより明確に、そして説得力を持たせると同時に、自分の言葉や知識に責任を持つという大切な過程でした。つまり自分との闘いでした。

今三年間を振り返って思うことは、学業への復帰が十二年のブランクから目覚めたかのように毎日が新しく、自分がこれまで見てきた日本の景色を、別の角度から別の価値観で見ている姿勢があることです。それは大学院で学んだ知識であり、考えようとする積極的な姿勢です。そして何よりも年代を超えて共に学んだ仲間やユーモラスで魅力にあふれる素敵な教授陣は、その姿勢のバックボーンであります。最後にこの場をお借りして、充実した大学院生活を過ごさせてくれた先生方や院生の仲間、そして、このすばらしい機会を与えてくれた職場や家族に心から感謝したいと思います。